

## 合唱運動に生きた人 秋山日出夫

座談会 高田金八（指揮者） 平塚幸之助（H・G）

磯部倅（作曲家） 外山浩爾（指揮者）

「八・モニ・」NO20 昭和51年7月発行

このたび、秋山先生が亡くなられて、合唱界としては大変な柱を失ったということだ  
と思うんです。私達は秋山先生を通じて合唱の楽しさを知ってきたと思いますけど、今、合唱活  
動に残されてきた秋山先生の足跡といったものを、話していただきたいと思います。この間のご  
葬儀の時は、平塚さんは大変だったんでしょう。

**平塚** とくに大変ではなかったんですけどね。一番困りましたのは、密葬をやってから本葬ま  
でに時間的余裕が無かったことでしたね。秋友会の連中があっちに飛んだりこっちに飛んだりし  
て、一生懸命やってくれましてね。秋山先生は戒名が無いんです。遺言でオレが死んでも抹香く  
さいことはやるなと、戒名なんかいらぬぞと、それで俗名でやったらしいんです。だからお寺  
さんは無いんじゃないですか。秋山先生の家は仏壇も神棚も無いんですよ。それから秋山日出夫  
というのはいわゆる俗名で、叙勲のときに届け出を出したんですけどね、秋山日出夫の“ひで”  
が戸籍上は秀なんです。（注。原文は秀 日出ですが、実際は秀雄 日出夫に変えています。昭  
和6年までは秀雄で、昭和8年から日出夫になっています。）それを知らないで日出夫で出したん  
ですよ。だから市役所もずいぶんあわてたようですよ。でも先生が言い置いたので、位牌は秋山  
日出夫になってました。

**高田** とうとう僕は秋山さんのかくし芸を教わらなかつたけど。

**磯部** 幽霊の？。

**平塚** あれは商売にもなりましたよ。もうずいぶん前の話ですけどね。日比谷の飛行館という  
ホ－ルで出したことがあるんですよ。あるショ－の一部でね。ちゃんと額に三角の布をつけてや  
ったんです。

**外山** あれは、先生が明大グリ－を教えて10年目の時かなんかに、オレは1回だけやって見  
せるからと言われて。あれは義太夫なんですか。

**磯部** そう、義太夫が基調になっていて、語るわけよ。ある物語が有ってそれが色々装飾され  
て、現代のタンゴが出てきたり、ワルツが出てきたり、踊ったり、色々になってくる。ポ－ンっ  
て鐘が鳴って怖いところとか、とにかく三角の白い布をつけて死者が甦るところから始まるんだ  
から。

**外山** そうそう、自分がなぜ幽霊になったかというところから始まるから、何が始まるんだろ  
うと思ってみんなが非常に注目するんですよ。

秋山先生はどういうきっかけでコ－ラスの方に入られたんですか。音楽学校出の方で  
はないわけでしょ。

**高田** 合唱連盟の中で、素人から入ったのは津川主一さんと秋山さんと僕と三人だけなんだ。  
あとはみんなそれぞれの専門家が集まった。秋山さんの話を聞いてると、どこの学校を出たの  
か知らないが、オレが旋盤工だったとき山口隆俊さんと知り合って、それでコ－ラスに入ったと  
いうことを言っていましたね。

**外山** 偶然お聞きしたことなんですけど、先生は発明したっていうんですよ。昔の機械屋として。汽車がレールを走ると、カブする時ヘッド・ライトは固定してあるから、いらぬところをうつしている。だから、車輪と同調してカブによってヘッド・ライトが曲がっていくやつを考えた事があるっていうんですよ。オレがあの特許を取ってたら、今頃大金持ちになってたよっておっしゃってましたよ。

**平塚** そりゃ初耳ですね。

**高田** 僕は旋盤工ってこときり聞いてないなあ。

**磯部** そう、彼は好んで旋盤工って言葉を使いましたよ。いわゆる工員の一番下っ端っていう表現で。ただ山口隆俊さんの作ったリ・ダ・タ・フェルに入って始めて合唱の味を知って、第一回の昭和2年のコンクールの、リ・ダ・タ・フェルのトップ・テナとして歌った。その時の指揮者が山口さんだった。そこからスタットしたんじゃないですか。その頃ちょうど小松先生が留学から帰られて、日本中みんな合唱させたい国民皆唱運動ということで、合唱コンクールをやった。そのへんが小松先生達との結びつきで、秋山先生の正式な第一歩ですね。

それからヴォーカル・カルテットかなにかでレコーディングされたというのは戦前のことなんですか。

**磯部** ええ、リ・ダ・タ・フェルを作って、山口さんの後を受けて一生懸命やっていたんだけど、良く歌える連中4人でカルテットを作って、コロビアのレコーディングなんか顔を出した。それが亡くなった中野忠晴さんがデビューした“山の人気者”というレコード。そのときのバック・コーラスに秋山さんがいたんです。今でもリバイバルでレコードよくかけますけど、あの時にあれが大ヒットしたんですね。

**高田** あのコーラスはなんとかボイなんかかって名前があったんですよ。

**磯部** そうです、ミルク・ブラザーズです。リ・ダ・タ・フェルはビクターと関係ができたけれども、4人で別にやってたんですね。

**平塚** ということは、その頃はもう旋盤工はおやめになってたんですか。

**磯部** ええ、もう合唱だけだったんです。

戦争が終わって、とたんに合唱連盟が動き出したわけですか。

**高田** 連盟と名が付いたのは戦後だがねえ。その前は国民音楽協会でコンクールをやってたから。

**平塚** 合唱連盟としてやったのは、昭和22年ぐらいからですか。

**磯部** 全日本の組織ができてやり出したのが昭和23年ですね。秋山さんがリ・ダ・タ・フェルで合唱の喜びを知ったのが男声合唱だったでしょう。それで男声合唱に魅せられてずうっときたわけでしょう。初期はそうだったと思うんです。だから秋山さんの功績は男声合唱の喜び楽しさ、つまりドイツのリ・ダ・タ・フェルの精神ですね。

**高田** リ・ダ・タ・フェルが1位を取る前は毎年オリオン・コルが取ってたんですよ。

**磯部** オリオン・コルというのがやっぱり男声合唱なんですけども、リ・ダ・タ・フェルよりも専門家が入ってたんですね。つまり音楽学校を出た専門の歌手という人が何人かいてね、ちゃんとしたキャリアの有る人が朗々と歌うわけ。どうしてもリ・ダ・タ・フェルの一歩上にいたんです。で、秋山さんのリーダー・タ・フェルはその後を追ってたわけですね。

**高田** オリオン・コルが下火になったときに、オリオン・コルの吉田永靖さんと、秋山さ

んと僕と3人が連盟を作ろうかっていってそれで始まってね、音楽協会ができたんだ。

**磯部** 秋山さんは山田耕筰先生に可愛がられてたんですね。“黒船”という山田さんのオペラの一番最初の“黒船だあ”って高い声で飛び出してくるのが秋山さんで、それは君の声がぴったりだって言われてたんです。そういうことで山田先生にはかなり、かわいがられてた。だから戦争中も山田さんが隊長の、音楽挺身隊なんかでいっしょにまわったりなさったと思います。

**平塚** あっちに行って歌ったり、こっちに行って歌ったり。よく言っていましたよ。

**外山** そうなると秋山先生というのは素晴らしいですね。昭和の2年に歌を始められた時から、ずうっと続けて今日まで合唱から離れずに

**平塚** 50年ですか、合唱で生きてきた人ですね。この間新宿でやった古希の祝の時に言われてましたね。オレもとうとう50年間やってきたって。

**磯部** 音楽の専門コ-スを取らないで、今よりもっと合唱とか音楽が理解されていない時代に、男一匹、しかも肩書きが無くてやってきたということは、ずいぶん大変だったろうし、立派なことですね。

**高田** 一番苦しかったのは国民音楽協会の最後だね。金が無くなって、赤字ばかりでね、どうしようかとずいぶん悩んだね。そこへ朝日の野呂信次郎さんがやってきて、色々心配してくれてね、企画部に入れてやろうって、赤字もたいしたことないからオレの方で背負ってやろうって、飛び込んでくれたんですね。はじめは後援でやってくれて、1年経って、この運動はたいしたもんだというので、全日本合唱連盟というのが成立したんです。

それが戦後の第一歩ですか？。

**高田** そうですよ。それで学校、高等学校と大学が入り部門別に分かれてやるようになったんです。職場部門が増えたっていうのは、一つは秋山さんのおかげでもあるね。新聞社の力もあるけど、秋山合唱連盟だよ、ほとんど合唱で生きちゃった人だもの。

**平塚** そうですよ。それ以外何もありませんよ。

**外山** 秋山先生の素晴らしいさというのは、一方ではもちろん音楽というものを専門的に学んで専門的にやるのが素晴らしいという所を持っていながら、一方ではさっき出た国民皆唱とういような運動を最後まで続けられたこと、あれが偉大だと思いますね。歌を歌うということの楽しさというものを会得しろと

**高田** そうなんですよ。合唱の味を本当に味わせた人ですよ。

**外山** だからよく私達には、お前達がやっている音楽というのは音という字の下に苦しいと言う字を書くんじゃないか。オレの音楽は音が楽しいと書いてあるんだということをおっしゃいましたがねえ。合唱の楽しさを解りやすくされたという功績は、大きいと思いますね。

**高田** 秋山さんは合唱を指揮しているときに自分で楽しんでるね。カラヤンが目をつぶっているのと同じようなものですよ。そしてその音のハ-モニ-を楽しんでるんですよ。

**磯部** 秋山さんの一番良いのは、食事をした、ビールを飲んだ、さあ歌おうというときに、パッと歌える合唱団を持っていて、そういう曲目とム-ドを持ってるのね。だから、入場料いくらいくらで、席は何席あって何日何時にとか、そういう演奏会のム-ドじゃないと思うね。幕が上がってスタスタと出てきて、組曲の何とかを、2曲目は何とかを、というのと全く違うんだ。その代わり暗譜で得意な曲をいっぱい持っていて、所に応じて歌える、そういうアマチュア合唱の心を知ってて、それを楽しんでた人じゃないかと思う。

**外山** 実はお通夜の晩にHGメンネルコ-ルの方々が焼香された後、そこでバンバン歌い出したんですよ。だれが歌うともなく始まって、秋山先生の好きな歌が全部出てくるんですよ。これだなと思いました。合唱団員一人一人とのメンタルな心のつながりといいますか、これが大きいですねえ。

**磯部** 音楽だけを切り離れたんじゃなくてね、生活の一部に音楽が有って、一升ビンをデンと置いてそれを横目で見ながら歌ってるということは、誤解されるとヘンなことになるけど、そうじゃないんだね。酒を飲みたいから練習してるんじゃないくて、練習が終わったらみんなで飲んでまた歌おうという気持なんですよ。そういう今の合唱に欠けてるようなある楽しさを充分やってきた人だと思いますね。秋山さんがコンク-ルにいっぱい出たということも、チャランポランにやってないというケジメみたいなもので、コンク-ルでどんな団体にも負けないと、オレは三つ指揮したけどみんな1等じゃないかという。そういうケジメというか、自分の男としての節をつけるところがあったんで、コンク-ルにピシッと出てね、去年も一昨年も1等取ったけど、今年もまた出るんだということは、世に問うたということじゃないですか。

今お話を伺って良くわかってきたんですけど、秋山先生がコンク-ルに間に合いそうもなくて、飛行機で飛んできて二日酔いで頭がガンガンしながら振って、それで1位を取ったとか、非常に豪快なお話を伺っているわけですね。だけど中はちゃんと細かく計算されて、音楽のことに關してはちゃんとやってるんだという。

**磯部** 酔っぱらって二日酔いで振ったというのは表面であってね。もうピシッとできてるんだよ。彼としてはものすごくやってあるわけ。それで安心してからそういうことができるんでねえ。そこで楽しんで出てきてる。すべきことをして、あとは楽しむというのがほんじゃないかなあ。

合唱講習会なんかでも、お土産を持たして帰すといいますか、楽しませて帰すということに關しては非常に長けてらした。ああこの講習会に来てよかったなと思わせるのがうまいですねえ。練習曲にしてもその合唱団に合ったといいますか、あまり背伸びをしなくて、そこで充分楽しめる曲を選ばれるのが非常にうまいように思うんですけど。

**外山** 職場の合唱団をある時期たくさん持ってらしたことがあるでしょう。それなんかも、各合唱団から非常にいい雰囲気を引き張り出して、その和合の頂点でもって音楽をみんなに楽しませてるということは、素晴らしいことだと思いますね。人数が少ないから大変かなあとと思うと、それが意外に難曲を歌っちゃってねえ。人数が多いので大曲を歌うかと思うとかわいらしい曲をきれいに歌ったりして、ああなるほどこういうふうにするのかなあと、勉強させられる部分が多かったですね。また、秋山先生は合唱団員が大ミスをして絶対にお怒りにならない、今度は勘弁してやるから、この次からがんばればよろしいという励ましが先に立って、後で個人にはおっしゃいますけど、みんなの前で顔に表わして怒る図というのはみたことがないんですけど。お若い時はどうでしたか。

**高田** それはないんじゃないですか。怒るということはなかったですね。ある程度不満があるとかということは言っていましたけどねえ、でも少なくとも顔に表して怒るということはなかったですね。

**平塚** 30年間お付き合いさせていただきましたけど、顔色が変わったというのは1回か2回じゃないですか。それだって怒鳴りとばすなんて事はないですよ。コ-ラスのことで怒られたこ

とは絶対に無いですよ。

**高田** そのかわり、ここはこうやった方がいいよとか、ね。

**磯部** かれの言った言葉で忘れられないのは、磯部さん、ぼくは非常に幸せだ、どこに教えに行ってもものすごい名幹事がいて、女房役をピシッとやってくれるって、たとえば平塚さんだってそうだけど、名キャッチャーがいてどんどんやってくれるから、僕はすごく“らく”なんだよって、こう言ってたんだ。最初それを聞いたときは、へえ、運のいい人だなんて、僕も若いときだから思ったけど、そうじゃないんだよ。彼がやっぱりそういうふうで育てるわけよ。だからどこに行っても育っちゃうんだ。どこに行ってもそういうムードができて、その中から名女房役が出るんだよ。それが彼の偉いところだね。だからうまくなっていくわけね。秋山さんは自分が歌って、カルテットもやってね、リーダー・タ・フェルをやって、プロ的な録音をやったりラジオ放送をしたり演奏会をしたりやって楽しんで、その後今度は職場を廻って良い職場の合唱団を育てた。大曲をちゃんとやってコンクールでも1等をとるようなのをいくつも育てたね、で3つめの仕事としてお母さんコースにきたところですね。ああいう慎重な人だから、いきなりばあつとはやらないけれど、じわじわ連盟の考えが基本にあって、それに合ったような歩み方で少しずつ前進してる途上だったね。それが非常に惜しかったですね。最後の仕事がお母さんコースだから、秋山先生というとお母さんコースの担当重役みたいに思われてましたけど、それだけだと秋山さんの三分の二が隠れてしまうんで、そのことを多く知ってもらいたいと思いますね。秋山さんの持ってたアマチュア合唱精神というものを、もう一回復活するといいいように思うんですよ。つまり演奏会形式とか、タキシードを作るとかユニフォームを着るとか、そういうことが先行しちゃうわけ。昼休みでも、ものすごく楽しい歌をうまく楽しんで歌ってれば、メンバーも増えるんじゃないかと思うんですよ。それが中途半端な、演奏会をやりますから来てください、というようなことをもう一回元に戻して、自分の職場のホール、あるいは食堂でやるから聴いてくれというのが秋山さんの精神で、それを見たり聴いたりするとああオレも入ろうということになるんじゃないかなと思うんですよ。だからその点でも、もう少し秋山さんにがんばってもらいたかったね。つまりコンクールで1等だという賞状を見せないと社内が動かないというのはおかしいんだよ。社内で昼休みに歌っていることが、どんなに素晴らしいことなのかというムードが有っていいんじゃないか。それにはあの秋山さんの音楽と指導力がすごく大事じゃないかと思うね。

**高田** 指導力はたいしたものだねえ。天才だろうね。

**平塚** 人間の気持ちをつかむのが上手じゃないですか。

**外山** そうなんですね。さっきもちょっと申上げたように、いわゆるメンタルな面でのつながりというのは、誰がまねしようとしてもできませんね。さっき磯部先生が一方では非常に綿密であるというお話がありましたけど、僕も驚いたんですね。秋山先生は大学ノートに何月何日何をやったら全部書いてあるんですよ。教育者としてもすばらしい面を持っている。われわれも見習わなきゃならない部分が有りますよね。

**平塚** あの方は非常に几帳面で、手帳にはいつもピシリ何か書いて有りましたね。

**磯部** 僕がそれを知ったのは、秋山さんがヨーロッパ旅行をしたでしょう。帰ってきているんな写真を貼ったりしたノートを喜んで見せてくれたんですがねえ、綿密に整理してあるのね。地下鉄の切符が2枚有るわけ。なぜかというと、1枚は貼ると裏が見えないから。コインも裏表2枚貼って有るわけ。そういう人ですね。

**外山** 大学ノ・トか何か、お仕事でお会いになった方の名刺を貼ってそこにその人の用件が入っているということも聴きましたね。

**磯部** ヨ・ロッパ旅行中にそれをやってるんですね。ホテルで夜遅くまでかかってそれをやってからじゃないと眠れない。そういうすごい綿密なところがあるから、コンク・ルに出ても1等になるのは決まってるのよ。どんなに失敗してもヘンな音になることはないもの。

**高田** リ・ダ・タ・フェルでは、しょっちゅうバランスを気にしてたね。1人ちがうと1割ちがうからね。実際ねビクターの練習場で練習している頃は10人くらいだったな。練習した後みんながしいんとしちゃったんだよ。おかしいなあと思ってたら、僕は今日は一番良く歌えたなって、みんながしゃべり出してね、これが本当の男声合唱の味だなあ、なんてことが二度ぐらいあったね。非常に良い気持になってね。秋山さんという人は合唱の中にすべてがあった人だね。しかし病気だけは合唱じゃ直せなかったな。

最後までご存知じゃなかったんですか、癌だということ？。

**平塚** 知らなかったです。早かったですものねえ。入院して1週間くらいだったんじゃないですか、切っちゃったの。かなり悪かったですよ。とにかく医者が、あけてみてこんなにひどいとは思わなかったって言ったそうですから。

**磯部** がまんしてたんだね。

**外山** 合唱コンク・ルの全国大会や何か、こらから続いてくるけど、ピカピカのハゲ頭が、ちょっと猫背みで、足をすり足にトットとダブルを着て出てこないと始まらない。まだ信じられないという気がしますね。

**磯部** 僕はプライベートなことですけど、お葬式の日が僕の作品発表会の日で、ちょうど同じ時間にあったものですから、お葬式の場に行かないからお信じられない。だから今外山さんの言った光景がすぐ来月見られるような気がしますね。

私達青山葬儀場で受付のお手伝いをさせていただいたんですけど、だれか抜けてるんじゃないかって気がしてしょうがなかった。ご本人が抜けてたわけなんですね。合唱の会っていうと秋山先生がいないと寂しいという感じがありましたからね。

**磯部** かれは下町の育ちで、今で言う庶民性があるのね。それがアマチュア・コ・ラスというものとピッタリきたんじゃないですか。だから理屈じゃないんだよ。だからオレは旋盤工出身だと、ピアノも弾けないし、だけど心で歌う。みんなで気持を合わせてやれば楽しくて良い音楽ができる、これだけじゃないですか。だから彼がある程度名をなして、アマチュアの高いところにいるというんでNHK放送合唱団なんかで、指揮に呼んだことがあるんですよ。だけどああいうところは理屈で、さっきはこっちへ振ったけど、今度は出ないのかとか、そういうことをやられて秋山さんまいったわけ。秋山日出夫というものを理解するム・ドが足りなかったと思うんだ。無視してるわけじゃないんだけど、知らなかったんだね。幹部は認めてるから呼んだんでしょうけど、結局なんとなく両方でうまくいかなかったんですよ。呼ぶことは非常に良い企画で、アマチュアの高い所にいる秋山さんと楽しくやろうとしたんだろうけれど、あの頃は歌う方が硬かったんですね、今はもうそうじゃないと思うんですよ。昭和25,6年頃でしたかねえ。その頃は齊藤秀雄さんなんか非常に喜ばれて、キッチリ理屈で、こう振ったらこう声を出せということをやって非常に受け入れられて、ちょうど秋山さんの裏返しだったわけですよ。

**外山** 秋山先生は、いわゆる理屈を言う人に対して、音楽が先にできたんで、後から理屈がで

きたんだ、まず最初に音楽をやろうじゃないかと、いうことを説かれるんですけども、これは専門にやってるものにとっても、大変貴重なことだと思うんです。

**高田** アマチュアはそこから育つんですよ、理屈は後でね。専門家は理論が先ですからね。そこで食い違っちゃうんですよ。

**磯部** とくに日本の場合は偏りすぎてるんですよ。輸入されたものだから。外国では評論家でもピアニストでも指揮者でも、みんな小さい時から歌ってるから、コ・ラスができるわけでしょ。けど日本のは理屈から入っていった人もいるから、コ・ラスをやれて言ったってできないような専門家もいっぱいいたわけですね。そういうところのム・ドの差じゃないですか。秋山さんが旋盤工ということをしきりに言ったのはそれなんですよ。けどどうだというような自信があったと思いますね。だからもうちょっとがんばってもらいたかったな。

**外山** 音楽という世界の中から考えた場合に、秋山先生ほど合唱一本で、あれだけ名前を轟かせた人は日本にいないんじゃないかと思いますね。

**高田** 合唱にも色々な人が出てきたけれども、あんなに熱心で、熱心以上だね、自分のものにしちゃった人はいないね、合唱を。

**磯部** 編曲とか作曲とか作詞とか、意外と実力を蔵しておられたかもしれないけれど、それを一切出さなかったですね。

**外山** 演奏作品なんかでも、ご自分で納得されたもの、よくかみしめたものが前面に出ていますからね。君は難しい方をやれて、よく私言われましたよ。(笑)難しいというのは、外国語の曲を秋山先生は否定されてたわけじゃないんですよ。それはお前が勉強したヤツなんだからお前やれと、そういうようにケジメがきちんとしてらっしゃるんですね。交通事故遺児のことをとりあげた曲をおやりになったときは、本当にあの先生かと思うほど厳しい顔をされてね、この悲しみがわからないかって練習されました。素晴らしい音楽でした。そういう一つのものに対する反応といいますか反射は非常に敏感でいらっしゃったですね。音楽の上での表現とか自分の音楽に対する表出とかには、ロマンチストでいらっしゃるというように感じますね。その訴えを先生の合唱団は持ってるから、より広い人達の共鳴を呼ぶんじゃないかと思いますね。

秋山先生はよく拳骨節とか、民謡みたいなものをおやりになりましたね。また外国の曲でもほとんど訳詩でおやりになってたと思いますけど。そういうことについてもご意見をお持ちだったんですか？。

**外山** 秋山先生はレコ・ド録音なんかさってて、言葉の発音を明確にするというようなことに関して非常に適確な指示をお与えになってたんで、日本語でより解りやすく、より良い表現ができればそれの方がいいんじゃないかということが根底にお有りになったんじゃないですか。一時期はやりましたね黎明序曲という曲。原曲はドイツ語なんですけど、日本語の方が感じが出てるっておっしゃったことがありますけど。

**高田** 歌の感じを自分ではっきり握らなきゃ気がすまなかったんですね。あれは“港が見える丘”の東辰三さんの作った詞ですね。

**磯部** 藤井清水さんが作った拳骨節や“水夫の歌”が彼の非常に気に入った曲ね。日本的のような、ドミソがあるようなね。

**外山** そう言われれば藤井さんの作品が非常にお好きでしたね。

**磯部** つまり民謡を取り入れてドミソ、ラドミで書いた人ですからね、藤井さんという人は。

だから秋山さんの心情にぴったり共通してたんですね。

**外山** 古希のお祝の時、自分の家は江戸の職人の家なんで三味線とか、そういう邦楽の音がまわりにあったそうで、どうして洋楽になったのかなあということをおっしゃったことを覚えてるんですけど。そうしてみると日本の歌に洋楽のハ・モニ・の入ったものに対する執着が少しはあるんですね。

**磯部** そうですよ、それと田谷力三の浅草オペラとか、ああいうものがちょうどミックスした時代の、そういう地域に育った人でしょ。藤原義江さんだってそうでしょう。まるでイタリ・のように思われてるけど、本当はちょっと違うんですね。だから日本の歌曲もうまい。そういう点がちょっと似たところがあるんじゃない。

**平塚** 秋山先生は関東大震災のとき本所に住んで、現在慰霊塔の建っているところに逃げたんだそうですよ。そこで気絶していたらきれいな歌が聞こえてきて気が付いた。その時そばできれいな若い女の子が賛美歌を歌いながら死んだっていうんですよ。それに非常に感銘を受けて歌が好きになったんだって言ってましたよ。

では秋山先生の遺産といいますか、合唱界に残しておきたいというようなことを少し

**高田** すべて残して置きたい。おそらく引き継ぐ人はいないんじゃないかな。もう少し長く付き合いたかったな。まだまだ会えると思ってたから。

**平塚** 私事の面倒をよく見ましたよね。HGのメンバ・でお金を借りに行ったのがいますよ。先生結婚式の費用がないんだけど。もちろん返しましたけどね。(笑)

**高田** やっぱり一つの団体の面倒を見るにはね、そういうところまで面倒みなきゃね。

**外山** 秋山先生は本当に音楽を楽しむ人でしたね。理屈とか理論とかを抜きにして、もう一ぺん、これから合唱をやっていく上で考えなきゃならないと思いますよ。

**磯部** とにかく歌ってから考えるんで、歌う前から考えたんじゃない駄目なんで、ちょっと行き過ぎたところがあるでしょ、最近。彼はそこに抵抗したと思うんですね。

**高田** 全く音楽にひたってたからね。

**平塚** 合唱団によって、相当高度なものをやらないと飽き足らない合唱団と、そういうことをやるとガタツとっちゃう合唱団と、そういうことを見分けるのが秋山先生はうまかった。

**高田** 合唱団のレベルによって選曲してやるところがうまかったね。それでじりじりと難しい物をやらしていくんだね。

**平塚** それで行き過ぎたと思うと、また落としてね。

**高田** 僕はそれを今まねしてるんだ。ちょっと難しいものを入れては、だんだんレベルを上げていく、秋山式ですよ。

では、このへんで、どうもありがとうございました。